倫風宏話

# 柔軟で丁寧な倫理実践を根気よく

上廣哲治

昨年、日本を代表するメーカーの不祥事が相次いで明らかになりました。ある大手自動車メーカーでは、出荷前の車両を無資格の社員が検査し、資格のある社員の印を押して検査を済ませていました。また、某大手鉄鋼メーカーでは、航空機や自動車に使われるアルミ製品などの検査データを改ざんしていたそうです。データの改ざんくらいなら不良品を良品と偽って納品するほど悪質でないから構わないと、よもや思ったわけではないでしょう。でも、やらねばならないことを手抜きして行わなかった結果、「モノづくり大国・日本」の信用を失墜させた責任は大きいといえます。

不祥事を起こしたある会社には、次のような決まりがあったそうです。取引先と契約した品質規格を満たさない製品は作り直すか廃棄する。しかし、先方が品質に問題がないと了承すれば、出荷することができる。また、規格に外れた製品は再度測定し直して、それが規格に収まれば出荷できる。ただこの場合、最初の検査でなぜ規格外の数値が出たのかを調べて、その理由を説明する必要がありました。

品質保証の責任者は、限られた時間のなかで多くの作業をしなければならないため、取引先の了承を得たり、再測定して社内で説明したりする手間をかけるよりも、データを改ざんしたほうが手っ取り早いと考えて不正行為をしてしまったのかもしれません。規格を満たさないといっても、ゼロコンマいくつという微差ですから、求められる強度を損なうことはないのでしょう。検査数値を完璧にクリアしなくとも、高品質なのだから問題ないとの思い上がりがあったことは否定できません。

新聞記事でこの事件を知ったとき、私は「ゴルディアスの結び目」という故事を思い出しました。

小アジアを転戦していたマケドニアのアレキサンドロス大王はフリギアの都ゴルディオンに立ち寄った際、その結び目を解いた者は王になるといわれる「ゴルディアスの結び目」に出合います。これまで何人もの勇者が解こうとして解けなかった結び目に、アレキサンドロスも挑みますが、解くことはできません。すると彼はおもむろに剣を抜くと、その結び目を一刀両断に断ち切ったのです。

この故事は、「思いもつかない解決法」を表す比喩に使われるようなりました。

しかし、よく考えてみると、これは真の解決法とはいえないのではないでしょうか。なぜなら結び目は「解かれた」のではなく、「断ち切られた」のですから。データの改ざんも同じです。取引先の了承を得る手間をかけるのでもなければ、再検査して原因を調査したわけでもない。問題を棚上げしたまま、データを改ざんして解決したように見せかけたのですから。アレキサンドロス大王のように結び目を断ち切って、解いたことにしてしまったのです。

正直申し上げて、私たちの実践にもこうした手抜きがあるのではないかと危惧を抱くことがあります。困難な問題が起きたとき、その問題と正面から向き合い、深く考えずに実践をする。この問題にはこう実践するものだと紋切り型の発想で納得してしまう。そこには、倫理を学んでいる私たちには間違

いはない、といった思い上がりが潜んでいるのかもしれません。これでは実践の実が上がるはずがありません。いや、むしろ害になるかもしれません。

あるお母さんからこんな話を聞きました。

小学六年の娘さんが突然塾をやめたいと言い出したそうです。数か月前に自ら親に頼み込んで許しを得てやっと入ることができ、嬉々として通っていた塾をいきなりやめたいというのです。お母さんは、娘の身勝手さに腹が立ち、思わず厳しく叱りました。

翌日、冷静になったお母さんは、なぜやめたいのか、その理由を娘さんに尋ねました。

すると、数日前の深夜、お父さんが、会社の業績が悪く今年は賞与が出ないと母親に話すのを聞いてしまったというのです。無理を言って塾に通わせてもらったけれど、月謝が家計を圧迫するかもしれないと悩み、やめることにしたといいます。それを知ったお母さんは思わず詫びて娘を抱きしめたそうです。

では、どうするべきだったのでしょうか？

『武士道』の著者として知られる新渡戸稲造博士は、国際連盟の事務次長を務めていたとき、当事国の利害が複雑にからまる領土問題を地道な努力と忍耐のすえに解決に導きました。それぞれの国の意見に耳を傾け、もつれた糸の結び目を丁寧に解きほぐして解決したのです。

一九二〇年、北欧の国フィンランドとスウェーデンは、バルト海にあるオーランド諸島の帰属をめぐって争っていました。仲介役のイギリスは問題の処理を当時の国際連盟に委ね、それを任されたのが事務次長の新渡戸博士でした。フィンランドは長くロシア帝国の支配下に置かれていたためにオーランド諸島もロシアに帰属しています。一九一七年のロシア革命を機にフィンランドが独立すると、島の領有



権を主張しました。ところがオーランド諸島はロシア帝国が支配する前にスウェーデン王国の領土だった時期があり、島の公用語はスウェーデン語で島民はスウェーデンへの帰属を望んでいました。

新渡戸博士は時間をかけて丁寧にそれぞれの意見に耳を傾け、裁定案をまとめあげました。オーランド諸島はフィンランドに帰属し、公用語はスウェーデン語とする。島には軍事と外交を除いて高度の自治権を与え、もし紛争が起きたときには中立を守る。両国は喜んでこの裁定案を受け入れ、領土問題は解決したのです。裁定は、「新渡戸裁定」といわれ、現在でも高く評価されています。

つまり、いかに複雑で困難な問題でも手間暇を惜しまず、あらゆる意見に辛抱強く耳を傾け、柔軟に考えれば解決への糸口が見つかり、対応策はあるということです。その上で、その時その場の状況に合わせた丁寧な実践をすればいいのです。

「我も人もの仕合わせ」というわが会の倫理実践の大原則を守るためには、状況に応じて柔軟でしなやかな発想から導き出された実践をしなければなりません。先のお母さんは、「娘の考えをよく聞いて、どう対処すべきかもっと考えるべきでした」と付け加えました。快刀乱麻を断つがごとき、きれいで鮮やかな解決策はそういつもあるわけではありません。それでも、少しでも善い解決策を目指して、柔軟で丁寧な実践を根気よく続けるべきではないでしょうか。

さて今月の実践課題です。あなたの実践は、成果を急ぐあまり自分本位で粗っぽいものとなってはいないでしょうか？　今一度、相手の立場に立って自分の実践を見つめ直していただきたいのです。「家庭愛和」ならば、夫は何を望んでいるか、妻は何を求めているのか、そのために自分は何ができるのか。それを倫理の教えに尋ねていただきたいのです。結び目を解く鍵は教えの中に必ずあるのですから。